

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：82720

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720064

研究課題名(和文) 仏師運慶作品の成立と受容 霊験仏信仰との関わりから

研究課題名(英文) Establishment and acceptance of Buddhist sculptor Unkei works-from relation with the miraculous sculpture faith.

研究代表者

瀬谷 貴之 (SEYA, TAKAYUKI)

神奈川県立金沢文庫・学芸課・主任学芸員

研究者番号：50443411

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、運慶やその関連作品が、霊験仏信仰と密接に関わっていたことを指摘した。霊験仏信仰とは特別の由緒を持ち、利益をもたらすと考えられた仏像への信仰である。運慶による造仏は単に芸術的に優れていただけでなく、霊験仏信仰と結びつくことにより、多大な影響を与えたことを明らかにした。

具体的には、運慶による建久八年(1197)の京都・東寺講堂諸尊像の修理時の「仏舍利発見」について検討した。そしてこの修理で、運慶や運慶作品へ霊験性が付与されたことを指摘した。また建保七年(1216)の鎌倉・大倉薬師堂の運慶による造仏が、霊験説話と結び付き、後の鎌倉における造仏に多大な影響を与えたことなども解明した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I pointed out that Buddhist sculptor Unkei and his works were closely related to "the miraculous sculpture" faith. "The miraculous sculpture" is the faith in the Buddhist sculptures which is considered to have a special history and benefit. I clarified that Unkei works influenced followings not only by their artistic excellence but also by its combination with the miraculous sculpture faith.

Specifically, I examined the "Buddhist relic discovery" by Unkei when he had restored various sculptures in an auditorium of Kyoto Toji Temple in 1197. And I pointed out that by this restoration, miraculous properties were granted to Unkei and his works. In addition, I clarified that Unkei works of Kamakura Okura Yakushido in 1219 gave a tremendous impact to the followings in Kamakura period by combination with the miraculous narrative.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：運慶 慶派 霊験仏 霊験 興福寺 東大寺 東寺 大倉薬師堂

## 1. 研究開始当初の背景

仏師運慶は、その卓越した技量と、鎌倉という新時代に相応しい力強い作風により、後の日本彫刻史の展開に大きな影響を与えたことが知られている。

一般にこれまでの運慶研究は、その数少ない現存作例を対象として、作品論や工房論、または個々の作品の政治・宗教的製作背景などが論じられることが多かった。

このような現状に対して、本研究では運慶やその作品、及び関連作品も含めて、その造像背景に、特定の由緒や利益をもつ仏像への信仰＝靈驗仏信仰が、密接に関わっていたことを中心に指摘する。

そして、靈驗仏信仰が、運慶と鎌倉彫刻史との関係、ひいては日本仏教美術史上に、いかに大きな影響を与えているかを解明しようと思う。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、運慶やその周辺作品が、日本彫刻史に多大な影響を与えたのは、単に芸術的に優れていただけではなく、特別の由緒を持ち、また利益をもたらすと考えられた仏像への信仰、すなわち「靈驗仏信仰」と密接に関わっていたからであることを明らかにしたい。

そして、今までの美術史で主流であった「芸術家」運慶という理解について、見直しを提示しようと思う。

具体的には以下の～の解明を目的の中心とする。

運慶や、その父師康慶になど、いわゆる慶派仏師による、平家による南都焼討ち後の鎌倉初期南都復興造像にみられる、「古典学習」については、すでに諸先学により指摘されてきた。本研究では、それが単なる「古典」の「学習」ではなく、靈驗仏信仰と密接に関係していたことを、模刻や模像の問題から明らかにしたい。

これまでの運慶研究では、数少ない現存する運慶作品を中心に論じられてきた。そのため、運慶の造像を考える上で、些か制限された側面があった。そこで、本研究では、記録上知られる運慶の事績についても、十分に吟味・検討を加える。特に、ここでは運慶の事跡で見逃せない、造像ではないが東寺講堂像を中心とする靈驗仏の「修理」や、運慶作品をめぐる鎌倉幕府と靈驗仏信仰について検討したい。

運慶やその周辺作品が、後の日本彫刻史に多くの影響を与えてきたことは言うまでもない。しかし、従来の研究では、運慶作品の芸術的価値ばかりを中心に論じ

られてきた。実は、運慶やその周辺作品が、後々まで重要視された背景には、運慶自身の作品の靈驗仏化も大きく寄与していることを跡付けたい。

## 3. 研究の方法

研究目的を達成するための具体的な方法で中心となるのは、彫刻（仏像）を中心とした関連作品の調査と、そのデータの整理・研究を行う。ただ、その対象は関連の古書（聖教）・古文書、仏画や絵巻なども含まれる。そして、これらの作品の調査・データ整理・研究を順次行い、合わせて研究論文の作成・発表や、学会等での口頭発表も随時行う。

## 4. 研究成果

現在、本研究では以下の(1)～(8)の研究成果を中心に挙げている。

(1) 運慶と東寺講堂諸尊像の修理について  
運慶が地位と名声を確立したのは、建久八年(1197)の京都・東寺(教王護国寺)の講堂諸尊像の修理が極めて大きかったことを指摘するため、神奈川県立金沢文庫が保管する称名寺聖教のうち『東寺講堂御仏所被籠御舎利員数』『東寺講堂御仏御舎利員数』などについて、詳しく調査・写真撮影などを行った。

(2) 運慶作品と東寺講堂諸尊像について  
神奈川県立金沢文庫では平成22年度に特別展『運慶 中世密教と鎌倉幕府』を行った。展示された奈良・円成寺所蔵大日如来坐像や、東京・真如苑所蔵大日如来坐像、栃木・光得寺所蔵厨子入大日如来坐像は、東寺講堂主尊の大日如来像を強く意識して運慶が制作したものであるとされる。そこで、特別展の際に調査を行い収集したデータ(写真等)について、整理・検討を行って、運慶作品と東寺講堂諸尊像の関係が深いことを再確認した。

(3) 称名寺光明院大威徳明王像と愛染明王像について  
称名寺光明院の大威徳明王像(神奈川県立金沢文庫保管)は、その銘文により建保四年(1216)に、大日如来・愛染明王・大威徳明王の三尊の一つとして発願されたことが明らかである。このうち愛染明王像については関連作品が少ない。そこで鎌倉中期に活躍した仏師善円が制作した、西大寺愛染堂の本尊像が、その後、靈驗仏として信仰されるのに着目し、その関連作品を調査した。そして先行したであろう運慶の愛染明王像との関係について検討を行った。

(4) 像内納入品について  
仏師運慶は造仏

において、仏舎利を中心に像内納入品の作法を確立したとされる。平成 23 年度に神奈川県立金沢文庫では『仏像からのメッセージ 像内納入品の世界』を行ったが、ここでは平安時代末期から鎌倉時代を中心とする像内納入品を多数集めた。そこで仏舎利安置の方法を中心に調査を行い、運慶作品との比較検討を行った。

(5) 仏師運慶と解脱上人貞慶との関係について 解脱上人貞慶(1155 から 1213)は、鎌倉時代初期に南都復興に活躍した僧侶で、殊に興福寺の復興については、その出身寺院であることから積極的に関わった。運慶が一門を挙げて復興造像を行った興福寺北円堂の造営(1207~1212)にも、貞慶は深く関与したとされる。このことについて、『讚仏乗抄』や『弥勒如来感応抄』などの資料を検討し、北円堂全体の構想と造形に、貞慶の弥勒信仰と舎利信仰を融合させた思想が反映されている可能性を指摘した。その結果、現在、興福寺南円堂に安置される四天王像が、本来の運慶一門による北円堂安置像であることを導き出した。

(6) 運慶と大倉薬師堂の造営について 大倉薬師堂は『吾妻鏡』によれば、建保六年(1218)七月に北条義時が鎌倉・大倉郷に建立、同年十二月には仏師「雲慶」の作になる薬師如来像を安置して供養された。この薬師如来像に付属して十二神将像(戌神)が、北条義時を源実朝暗殺の厄難に巻き込まれるのを救ったという説話が流布することにより、鎌倉国宝館像(旧辻薬師堂)や奈良国立博物館(旧横浜太寧寺像)など、一連の運慶作品の模刻像が製作されたことを、研究代表者は明らかにしてきた。さらに、この大倉薬師堂様十二神将像の作例である、横浜・寶生寺の厨子入薬師三尊・十二神将・四天王像を集中的に調査することにより、それが鶴岡八幡宮に明治維新まで伝来した、同社の霊宝である可能性が高いことを明らかにすることが出来た。

(7) 国宝・重源上人坐像(東大寺所蔵)について 東大寺俊乘堂に安置される国宝・重源上人坐像は、我国の肖像彫刻史上、最高傑作の一つとして挙げられる。その像主である重源は、大勧進として、平家による南都焼討後の東大寺再建を、鎌倉時代初期に主導し、建永 年に没した。本像はその没後間もなく、慶派仏師、近年では運慶が造像した可能性が定説化してきていた。このことについて本研究では、金沢文庫や東大寺で保管する、鎌倉時代初期に東大寺別当を務め、重源と密接な関係であった弁暁の関連史料を再検討した。

その結果、本像が重源没後ではなく、正治二年(1200)前後に八十賀のために寿像として、東大寺別当であった弁暁により、運慶を仏師として製作された可能性が高いことを導き出した。

(8) 不動明王立像(仏法紹隆寺所蔵)について 顕著な運慶様式を示し、一説には運慶による製作の可能性が指摘される長野県諏訪市の仏法紹隆寺の不動明王立像について検討した。エックス線写真撮影の結果は、従前指摘されて月輪形銘札では無いことが判明したが、その詳細については継続して検討中である。また諏訪氏関連の史料を検討することにより、同像が12世紀末の諏訪氏と源頼朝との関係ではなく、13世紀初頭の諏訪氏と北条得宗家との関係から、すでに鎌倉幕府関連の造像で存在した尊像などを参考に製作された可能性もあることを導き出した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計1件)

瀬谷貴之、解脱上人貞慶の復興造像、日本印度学仏教学会第63回学術大会、2012年7月1日、鶴見大学

〔図書〕(計6件)

瀬谷貴之、平凡社、『運慶と鎌倉仏像 霊験仏をめぐる旅』、2014年、128頁

瀬谷貴之ほか、神奈川県立金沢文庫、『特別展 東大寺 鎌倉再建と華嚴興隆』(神奈川県立金沢文庫図録)2013年、136頁(16~18、114~134頁)

瀬谷貴之ほか、竹林舎、『図像解釈学 権力と他者』仏教美術論集、2013年、464頁(376~386頁)

瀬谷貴之ほか、奈良国立博物館・神奈川県立金沢文庫、『御恩忌800年記念特別展 解脱上人貞慶 鎌倉仏教の本流』(奈良国立博物館・神奈川県立金沢文庫図録)2012年、286頁(205~207、212~263頁)

瀬谷貴之、神奈川県立金沢文庫、『特別展 仏像からのメッセージ 像内納入品の世界』(神奈川県立金沢文庫図録)2011年、64頁

瀬谷貴之ほか、神奈川県立金沢文庫、『特別展 愛染明王 愛と怒りのほとけ』(神奈川県立金沢文庫図録)2011年、

88頁(16、76～85頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀬谷貴之 (SEYA TAKAYUKI)  
神奈川県立金沢文庫・学芸課・  
主任学芸員  
研究者番号：50443411